

瀬良英介の一般業界向け

飼料・畜産トピックス（232）

2010年5月

（232）日本の配・混合飼料は2009年暦年も伸びている

日本の畜産業界、及び、飼料業界はデフレ、国内外の金融・財政問題、進む自由化、激変した政治など相まって苦境に立たされていることは事実です。然し、日本人の食品安全性への強い関心や業界内での厳しい競争と内部改革などにより2009年（平成21年）暦年の配合・混合飼料の生産出荷量は予想に反して伸びました。また、その中での大豆ミール（粕）の使用量も伸びました。

アメリカ大豆協会として関心のある出荷量や生産量、畜種別使用量などを簡単に御紹介しましょう。これらの数値を案外と畜産生産者をご存知ない方が多いし、また、大豆搾油業界や畜産・飼料業界の中でも担当部署が違うかたはご存知ない方が多いです。

まず、2009年暦年（平成21年暦年）の配合・混合飼料の総出荷量は24,934,812トン、対前年比で101.3です。配合飼料の総出荷量は24,500,329トン、対前年比で101.0です。混合飼料総出荷量は434,483トン、対前年比で121.9です。

大豆ミール（大豆油粕）の総配合・混合飼料への使用量は3,337,191トンで、対前年比で102.1です。大豆ミール（粕）の総配合・混合飼料中の平均使用割合は13.45%です。

大豆ミール（大豆油粕）の総配合飼料への使用量は3,320,757トンで、対前年比で102.1です。大豆ミール（粕）の総配合飼料中の平均使用割合は13.64%です。総混合飼料への大豆ミールの使用量は16,434トンで、136.1です。大豆ミール（粕）の混合飼料中の平均使用割合は3.51%ですが、混合飼料で大豆ミールの平均使用割合が低いのは飼料の利用目的が違いますから当然です。

大豆ミール（大豆油粕）の総配合飼料の中での畜種別使用量、対前年比、平均使用割合はそれぞれ次のようなものです。育すう、成鶏用：937,353トン、103.2、そして14.69%です。ブロイラー用：853,757トン、102.0、そして21.51%です。養豚用：889,928トン、102.5、そして14.31%です。乳牛用：348,760トン、98.5、そして11.14%です。肉牛用：281,608トン、102.0、そして6.13%です。うずら用：7,611トン、77.8、そして22.64%です。その他の家畜家禽

用：1,740トン、51.0、そして8.47%です。

総配合飼料出荷量の約42%がブロイラーを含む養鶏用、約26%が養豚用、約13%が乳牛用、約19%が肉牛用でした。また、配合飼料用大豆ミール（粕）の約54%がブロイラーを含む養鶏用、約27%が養豚用、約11%が乳牛用、約9%が肉牛用でした。

余談ですが、上記の大豆ミールの対前年比などは筆者が参考資料から算出しました。参考資料としては農林水産省が集計して発表している飼料統計を使っていますが、非常に良く出来ているのが（株）飼料日報社が毎年、暦年と会計年度双方の飼料・畜産統計資料を編纂して出している統計です。同社は業界の動きやニュースも出版しています。購読や問い合わせなどに関心のある方は（株）飼料日報社（代表：03-5577-9633）にコンタクトされることをお勧めします（瀬良、2010）。